

## 教師を育てた 言葉たち

No. 022

### 愛媛県立丹原高校 五味 稔 先生

ごみ・みのる

◎教職歴 28 年。同校に赴任して 9 年目。教務課長・教務主任。担当教科は数学。同校での進路課長在任時、進路が決まった生徒にペーパーフラワーを作らせ、自分の進路先の名称を掲示する時に、それを飾らせるようにした。新入生には「あなたも先輩みたいに花を作れるように、一緒に頑張ろう」と声をかけるという。



**今** から 16 年前に赴任した前任校は、生徒の希望進路が多様で、教師には幅広い視野での生徒支援が求められていました。赴任 2 年目、進路課に配属され、国公立大学進学を希望する 2 年生の理系クラスの担任となった私が、生徒の進路実現の可能性を高める上で重視したのは、AO・推薦入試でした。ただ当時は、全国的にも AO 入試の出願指導のノウハウがまだ十分蓄積されておらず、生徒の志望を深めるためには出願までにどのような指導を行えばよいのか、明確な方針はありませんでした。

生徒の進路観を育み、大学での学びへとつなげる契機として私が提案したのは、地元企業への訪問でした。学校が所在する地域は製造業が盛んで、独自の技術を持つ企業も多く存在していました。そこで、そうした企業に生徒を訪問させ、大学での研究の目的を明確にさせたいと考えました。さらに、中学生を高校に招いて行う数学や理科のコンテストの企画・運営を生徒に任せるなど、多様な経験を積むことで志望理由をより強固なものにしてもらおうとしました。ただ、どれも初めての挑戦で、どの程度の成果がもたらされるのかは分からず、手探りの状態でした。そんな私の提案に対しての当時の校長の返事が「**思うようにやりなさい。生徒のために思うなら、やって無駄なことはない**」だったので。

新しい取り組みを前に二の足を踏むのではなく、失敗を恐れずに思いついたことはどんどんやりなさいと応援していただいたことに、私は心から感謝しました。管理職が明確な言葉で後押ししてくれたこ

とで、前向きな気持ちが学年団全体に広まっていくのを感じたことを覚えています。

3 年生に進級しても引き続き私が担任を務めたそのクラスからは、AO 入試での難関国立大学医学部医学科を含む 36 人の国公立大学合格者が出ました。そして、その時の大学合格者の約 7 割が、AO・推薦入試での合格者でした。1・2 年次から進学意識を高めたことで、第 1 志望大学の合格がかなわなかった生徒も「やれることはやったので納得しています」という晴れ晴れとした表情を見せてくれました。

**以** 来、この言葉は様々な場面で私を支えてくれています。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、本校が愛媛県で唯一、オンライン授業を全クラス全科目で実施することができたのも、「失敗を恐れずにやってみよう」という私の呼びかけに、若い先生たちが応えてくれたからだと思います。生徒からは、「先生方が不慣れでも一生懸命授業をしてくださっている様子を見て、自分ももっと頑張らないといけないと思いました」といった声を聞いています。やはり、「生徒のために思うなら、やって無駄なことはない」のです。

今後、少子化によって生徒募集に苦しむ学校が増えていきます。これまでは進路課長として「出口」のお世話をしてきましたが、今度は教務課長として生徒募集の「入口」のお世話をするようになりました。進路実績という「通知表」を、地元の中学生と保護者がどのように評価するのか、自分の目で確認することになり、進路指導の重責を再認識しています。

愛媛県立丹原高校 全日制／普通科・園芸科学科／共学／1 学年約 110 人／2020 年度進路実績（現役のみ）国公立大は、信州大、香川大、愛媛大などに 17 人が合格。私立大は、京都産業大、松山大などに延べ 54 人が合格。短大、専門学校進学 30 人。就職 26 人。